

のあり方を明らかにできれば、近代以降に規定されがちな日韓の交流関係を見直す、相対化する一つの材料を得ることができるようになると考えます。

考古学というのは遠い昔の話にすぎないという意見もあるかもしれませんが、問題の持ち方によっては現代社会に対しても様々な提言がしていける学問であると考えます。もちろん、これは考古学に限らず、ほかのどの分野の学問においても当てはまることだと思います。これからの大学生活の中で問題意識の小さな芽を大切に育てていくと一回り大きな視野で物事が見えるようになってくると思います。頑張ってください。

インカ帝国の実像を探る

森下 壽典

「インカ帝国」という名称は有名だが、その実像はあまり知られておらず、漠然と「帝国」や「古代文明」というイメージで捉えられている。高校世界史の教科書の中

でも、記述はごく僅かで、南米アンデス地域の「インカ帝国」も中米の「アステカ帝国」も、登場するや否やスペイン人によって征服されてしまう。その内容をみても、「インカ皇帝」は太陽の子とされ絶対権力者であったとか、周辺の社会を武力で征服しつつ拡大していったというような、「帝国」のイメージに引きずられた記述が多い。

そもそも、「インカ帝国」という名称自体が、その滅亡後に登場した呼称であり、本来は「タワンティンసు（四つの地域）」と呼ばれていた。これは、十五世紀半ば以降という、「古代文明」のイメージからすると比較的新しい時代に、クスコ（ペルー南部高地）周辺の小社会が、周辺の地方社会を統合しつつアンデス全域に急速に拡大したものである。その過程では、「帝国」

のイメージにふさわしい武力による征服もあった。しかし、「インカ帝国」側と、その支配を受けた地方社会との関係は、武力による抑圧のみを背景とした単純なものではない。もともと、アンデス地域では、贈

り物をされたらお返しをしなければならぬというような、互惠とか互酬性と呼ばれる関係が、社会を結びつける原理として極めて重要だった。たとえば、それぞれの地方社会の首長（リーダー）は、自らの農地を耕すために、民衆へ労働力の提供を求めることがあった。しかし、これは単純な強制ではなく、首長には、民衆側に食糧を提供するなど、労働力提供への対価が求められた。人間と神々との間にも、互惠の関係はあった。人間が神々に雨を降らしてほしいと望めば、その対価として神々に捧げものをしなければならなかった。「インカ帝国」は、巧みにこうした関係を利用し、ときに平和裡のうちに地方社会の首長と互惠の関係を結ぶことで、各地方社会を勢力下に取り込んでいったのである。

こうした「インカ帝国」やその文化に関する研究は、主に文書資料を基盤として行われてきた。「インカ帝国」は基本的に無文字社会であるから、ここで言う文書資料とは、征服者であるスペイン人の言語、ス

ペイン語で書かれたものを指す。書き手となったのは、主に征服者、宣教師などのスペイン人であるが、中にはスペイン語を学んだ先住民によって書かれた文書もある。しかし、当然のことながら、文書資料に書かれたことがそのまま事実ではない。征服者は自らの業績を賛美し、宣教師はキリスト教を布教するために先住民の信仰を誤った迷信と捉え、また先住民は征服者たちの悪行を告発するために自らを正当化する。こうした文書資料の問題に対処するには、もちろん厳密な史料批判が欠かせない。しかし、こと「インカ帝国」に関する文書の場合、その滅亡後に時間がたって書かれているものが多い、基本的にヨーロッパのキリスト教文化の視点でアンデス地域の文化が誤解されているなど、書き手の立場だけでなく、二重三重のバイアスがかかっていることを覚悟しなければならない。加えて、文書資料の数そのものが限定的である。

この点、人間活動の結果として残された遺構（住居や墓など）や遺物（土器や石器

など）を基盤とし、歴史や文化を研究する学問である考古学は、「インカ帝国」の時代に残された同時代資料を発掘調査によって新たに検出・記録・収集し、直接研究対象とすることができると言える。したがって、「インカ帝国」の実像を探るには、考古学を活用することが有効であると言える。実際に、たとえば、ワヌコ・パンパ（ペルー中央高地）という「インカ帝国」の大規模な遺跡では、「広場」の発掘によって数多くの酒壺が発見され、そこが酒宴の場として機能していたことが明らかとなった。すなわち、互恵的関係を維持するために、「インカ帝国」側が酒宴で地方社会側を歓待したということが、考古学的証拠によって確かめられたのである。また、アンデス山脈の高地における考古学的調査によって、実際に「インカ帝国」の時代に神々に捧げられた少女のミイラが多くの副葬品とともに発見され、文書資料では必ずしも明らかでなかった人身供犠の実態が詳らかにされた。こうした事例のように、考古学が文書資料によ

る研究成果を確認・修正し、あるいは新事実の発見をもたらすところに、「インカ帝国」研究の学問的おもしろさがある。

アンデス地域の遺跡は、車が通らないような僻地にあることも多く、実際の調査では、山の高所で過酷な生活を強いられることさえある。しかし、それでも発掘調査には独特の魅力がある。考古学が人間の残した物質文化を調査する以上、発掘調査は過去の人間が活動したまさにその場所で行われることになる。つまり、時代によって変化はあれど、昔の人々と同じ場に立ち、彼らが見たものを見ながら、調査を進めていくことになるのだ。ここに、考古学の最大の醍醐味があると考える。私自身も、南米アンデスの山奥で「インカ帝国」の遺跡を発掘し、周囲の素晴らしい山並みやそこに架かる虹、暮れる美しい夕日などを眺めていると、昔の人間も同じ光景を見たのかと感動する。かつてそれらは神々として崇拜されていたのだが、もっともなことだと私にも思えるのだ。